

「主体的・対話的で深い学び」の授業実践レポート

〇〇〇〇高等学校

〇〇科 〇〇〇〇

1. はじめに

本年度パイロット教員に任命され、研究授業をさせていただいたが、正直何をどのように工夫すれば「主体的・対話的で深い学び」の授業を展開できるのか分からないまま時間だけが過ぎてしまった。5月に全体説明があり、その後何もないうまま即授業実践だったので、すべてを託された状態で、このような形の授業展開をしていくというイメージをもてないまま研究授業が終わってしまったことは反省点であり、もっと教員同士が刺激し合えるような研修会や勉強会の場を与えていただきたかったというのが本音である。

2. 活動報告

私が教えている工業高校生の多くは卒業後に就職し、社会に巣立っていく。そのためにキャリア教育という視点においても、授業をしていくなかで社会とのつながりを意識させることがとても重要である。私は、現在1年から3年まで授業（座学）に行っているが、どの学年においても授業の前に現在の社会情勢や経済状況、さらに工業に関するニュースの話をする。これからめまぐるしく変化する産業社会に出て行くからにはしっかり技術や技能を身につけておく必要があるという前置きをしてから、授業に入ることを心掛けている。また、技術や技能を身につけるのは高校生までではなく、どのような職種であろうと将来ずっと学び続けていく必要がある、高校生までに学習方法を確立しておかなければならないことを言い続けている。

学習評価の方法においては、いろんな評価の視点が必要であると言われていたが、生徒に書いてもらう自己評価は生徒自身の自己分析をする指標にはなるが、あくまで自己評価であり、それを成績の評価対象にするべきではないと考える。生徒を評価するうえで、工業での実習においては、知識理解度としてペーパーテスト、技能としては作品及び加工技能（実技）、態度としては実習への取組や工具等の取り扱い、整理・研究としてレポートという内容で評価をしている。授業（座学）においては、技能の部分を発表の仕方やグループ活動での主体性や協調性、整理・研究の部分をノートやプリント提出と代替することで最低4方向からの視点で評価することが可能であり、現在はそのような形で評価をしているが、評価の視点においては、さらに臨機応変に対応していく必要がある。

3. おわりに

「主体的・対話的で深い学び」の主語は、もちろん生徒であるが、私たち教員にも当てはまるのではないと思う。主体的に物事について探求し、対話的に校内のみならず企業や他校の先生方から知識や技能、考え方を学び、最終的には自分たちが携わった生徒が、社会でどのような活躍を見せてくれるかというところに深い学びへとつながっていくのではないかと考える。

今回、このような機会をさせていただいたが、他県の状況を視察したり、他の学校で他教科の授業を見に行ったりする等、生徒同様に今までにないことを体験することで授業への取組やこれからの教員生活を見つめ直す機会が生まれたかもしれない。また、高等学校より先に新学習指導要領が始まる、小、中学校の授業を見るなどして、この児童・生徒たちが将来入学してくるという想定の下で授業をするなど、来年度以降は、私たち教員の視野がもっともっと広がるような10年後、20年後先を見据えたパイロット教員育成の取組をしていただきたいと願う。